



大正北ノ川



国 道381号の広瀬（弘瀬）トンネルから西に1kmほど、相去

川が四万十川に合流するところが北ノ川である。先月の烏手、先々月の市ノ又への入り口でもある。地区の産土神は河内神社で、現在64世帯、157人が暮らしている。

明治時代まで、北ノ川・北野川・喜多川村、市ノ又村、相去相佐礼村、弘瀬村、折合村と合わせた北ノ川六ヶ村の首都的役割を担っていた。庄屋制度が廃止になるまで、北ノ川村に庄屋を置き、その他の村には名本という役職を派遣していた。

先述の通り、北ノ川は相去川が四万十川に合流するところである。そのため水が常に豊富で、古代から人が暮らし続けていたと見られる。その証として、近代に入ってから行われた基盤整備の時、また、北ノ川中学校建設の時に、縄文土器が多数出土している。

さて、街の東側に小高い山がある。裾野には旧道が通っている。戦国期、この山には北ノ川城という山城があった。当時の城というのは、たいがい山城で、大阪城や姫路城などといった立派な天守閣のある城が建てられたのは、戦国末期になってからである。この山城の城主は田那邊出羽左衛門重正（後に上山氏を名乗る）で、もともと重正は上山田野々城の城主であったが、息子に田野々城を譲り、北ノ川城の城主となった。

この城がすごいのである。「遺構はとどめていない」などという書物もあるが、立派に城跡が残っている。



土居跡と思われる場所に建つ田那邊出羽左衛門重正の墓碑。

山城の専門用語になるが、土塁、切岸、曲輪、堀、横堀、堀切などと思われるものがいたるところに残っていて、下から攻め上がってくる敵に対する防御・応戦の仕掛けがこれでもかというくらいに施されているのである。さらには、本丸があったとされる頂上をはじめ数か所に、石垣を積んでいた形跡まで残っている。

はじめは中村の一条氏に従い、その後長宗我部氏の配下になったとあるのだが、戦国期というのは、この辺境の地にあってもこれだけの準備が必要なくらい平和ではなかったということが想像できる。この山城跡は、四万十町が誇っても良い文化遺産である。

城のすぐ裏側に、重正の墓碑が建っている。おそらくここに重正の住居（土居）があったと思われる。さらにその奥に観喜寺という曹洞宗のお寺がある。このお寺も重正が建立したのではないかとされている。

町のうごき

(1月31日)	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	7,825	-13	男 4	14	16	19
女	8,608	-19	女 1	19	19	20
計	16,433	-32	計 5	33	35	39
世帯数	8,335	-17	(1月中の届出)			
窪川地域 11,644人		大正地域 2,281人		十和地域 2,508人		

四万十川の 水質状況

	適正值(mg/l)	2月2日
リン酸	≤ 1.0	測定範囲以下
硝酸	≤ 0.5	0.984
アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下
アニオン活性剤	≤ 1.0	0.10
化学的酸素要求量	≤ 10.0	測定範囲以下

調査：大正（吾川）

資料：四万十高校自然環境部